

殉職によって表象される教師の心性

— 1920年代初頭の教師文化の一断面 —

学校教育開発学コース 岩 田 一 正

The Mentality of Teachers Represented Through Their Martyrdom:
A Certain Phase of Teachers' Culture Early in 1920's

Kazumasa IWATA

Through analyzing discourses of teachers' martyrdom on newspapers and educational magazines, the aim of this paper is to consider the reason why people paid more attention to teachers' martyrdom at the beginning of 1920's than before and how teachers' culture was transformed at that time. This paper examines two cases of teachers' martyrdom; one is of Torao Matsumoto, a middle-aged man teacher at an elementary school in Tokyo city, and the other is of Satsuki Ono, a young and new woman teacher at an elementary school in Miyagi prefecture. Matsumoto's accident happened in 1919, and Ono's in 1922, at the very time when there was the 50th anniversary of the proclamation of modern school system in Japan.

Analyzing and comparing articles on two sufferers, three points are revealed.

First, educational media excessively took up Ono's martyrdom than Matsumoto's. There were two reasons. 1) Ono died in 1922, when people in Japan retrospectively viewed the advancement of education and the contribution of teachers to it. 2) in those days women were in minority of elementary school teachers as well as of other fields in industry, and Ono was the first martyr of them. That was why many people's attention was focused on her martyrdom.

Second, in those days teachers' social status was low, and they bore hardships, so educational media made use of the martyrdom of Ono. She stood at a margin area of teacher groups because she lived in a countryside and was a young and new woman teacher. Therefore, the incident implicated that most teachers were assumed to devote themselves to the nation-state and children more than she did.

Third, educational media began to compare teacher martyrs to the war dead. So teachers were captured by aesthetic representation of beautiful death characteristic of the Japanese. The aesthetic spread in teachers' mentality at the end of 1930's, when the national totalism was completed in Japan.

目 次

はじめに一問題の所在—

はじめに一問題の所在—

I. 祝祭化されざる殉職—松本虎雄の殉職事件—

II. 殉職というメディア・イベント

—小野さつきの殉職事件—

III. 教育界における反響—教師文化の布置—

おわりに

1936年10月30日、大阪城公園大手前広場で第1回教育祭が開催され、教育塔の建立が祝われた¹⁾。教育祭では、学制頒布以来の殉職教師、殉難児童学生が存在が想起され、彼らは教育塔に祀られることになったが、本論文の主要な関心は、そこで再発見された近代日本における殉職教師の系譜の一時期にある。すなわち、本論文は、新

聞や教育雑誌を中心的な史料としながら、その後教育塔に祀られることになる幾人かの殉職がどのように記述されたのかを分析することによって、1920年代初頭における教師の心性を考察することを主題としている。

本論文では、主に2つの事例、すなわち松本虎雄と小野さつきという2人の小学校教師の殉職事件を扱うが、特に、近代日本教育史上最も注目を集めた殉職事件の1つである宮城県で生じた新任女性教師小野の殉職を巡る表象に焦点を合わせたい。

小野が殉職したのは、1922年7月7日のことであった。その後彼女を主役とする美談の物語は、新聞、雑誌をはじめとするメディアにおいて反復されながら増幅することになり、新聞や雑誌における報道にとどまらず、追悼講演会の開催、映画化、唱歌化など、数多くの活動を生み出すほどの大きな衝撃を社会に与え、その物語に多くの人々の関心を動員することになった。

小野の殉職以前にも、社会的事件として扱われた教育関係者の殉職は存在していた。例えば、古くは1896年1月1日、台湾総督府学務部員6人が現地住民に殺された芝山巖事件、小野の事件の数年前には1918年12月5日、朝鮮総督府京城府龍山元町尋常高等小学校が出火した際に、御真影を奉還しようとして焼死した鈴木志津衛校長の殉職、また1919年11月20日、東京府井の頭恩賜公園での遠足の際、教え子を救おうとして玉川上水で溺死した前述の松本虎雄訓導の殉職などは、人々の注目を集めた事件だった。しかし、いずれの事件も、小野の殉職ほど人々の関心を動員して祝祭化されはしなかった。では、どのような力学が作動することによって、彼女の殉職は大きな社会的出来事になったのであろうか。

小野の殉職に人々の関心が輻輳した背景には、学制頒布50周年に当たる1922年にその殉職が生じたという点がある。同年10月30日(学制が頒布された日)には、学制頒布50年記念祝典が、東京帝国大学構内で摂政裕仁をはじめ教育に関係のある朝野の名士など約3000名が出席するなかで盛大に催され、この記念祝典を中心とする時期に、学制頒布以降の教育制度の整備、教育実践の営みが改めて想起され、言祝がれることになった³⁾。この過程において、殉職教師の存在も称揚されることになり、その事績が新聞や雑誌において国家における教育の機能の無比性、教師の役割の重要性を立証するものとして記述されたが、殉職教師の象徴的存在が他ならぬ小野さつきであった。

実際、『殉職した教壇の人々』(大阪朝日新聞社、1927年)、『学園の百美談』(大日本美談社、1934年)、『日本殉職教育者傳』(上・中・下巻、大日本美談社、1936年)な

どを著し、自ら大日本美談社を興し、教育にかかわる美談を渉猟した田淵巖は、小野さつきの殉職について、次のように述べている。

「東北の女丈夫小野さつき訓導殉職水死の事、一度都鄙に喧伝せられ、其の崇高厳肅なる殉職の真相、世に明にせられるや、予は異常な感動を享受し、暫くは莊嚴なる女史の死の場面に対して、我と我が心身の剛直的緊張に、恍乎為す所を知らぬ有様であつたが、やがてまざまざ子女教化の尊貴と、教職の神聖とを体感し、身自らの教職者たることの光栄に想到して、思はずも感激の涙を禁じ得なかつた次第であつた。／此の瞬間！ 此の刹那!! 平素一個の教職者として、『如何に学制頒布五十周年を記念すべきか?』と、真剣に思ひ悩んでゐた予の内面を、天来の如く、激越に衝いたものがあつた。おゝ!! その有難きインスピレーション!! それは実に、本書の稿を起し、之を学制頒布五十年の記念日たる「大正十一年十月三十日」を以て、普く世に伝へようと云ふ、計画それであつたのである。」³⁾

小野さつきという新任の女性教師は、1922年に殉職したことによって、学制頒布以来50年の教育と「子女教化の尊貴と、教職の神聖」、そして「教職者たることの光栄」を象徴する存在へと神話化されることになったのである。

しかしながら、1922年において学制頒布50年記念祝典以前に殉職した教師は、小野だけではなかった。例えば、4月23日には武藤郡二が、新潟県刈羽郡岡田尋常小学校が山火事の類焼にあった際に、校舎に残された児童を救おうとして焼死していた。また、小野の殉職の3日前の7月4日には醫王吾延壽が、福井県丹生郡宮崎村宮崎尋常高等小学校東分教場が豪雨による崖崩れのため倒壊した際に、児童を救うために校舎に突入して圧死していた。しかし、いずれも小野の殉職ほど注目を集めなかった⁴⁾。彼女の殉職事件に関心が蝟集した背景には、彼女が女性教師であったことが大きくかかわっている。

当時、小学校教師において女性教師は約3分の1を占めるまでに増加してきていた。1900年度には全小学校教師9289人中女性教師は1227人(13.2%)であったが、1905年度には109975人中22194人(20.2%)、1910年度には152011人中40957人(26.9%)、1915年度には162992人中45810人(28.1%)、そして1918年度には172979人中53518人(30.9%)と30%を超え、1920年度には185348人中60298人(32.5%)に達していた⁵⁾。そして、1922年5月18、19日に開催された全国女子師範学校長会議では、日本初の女性教師の全国組織日本女教員協会が設立され、

また7月1-3日に開催された全国女教員大会では、全国小学校女教員会設立草案が可決されるなど、女性教師の全国的な組織化の動きが見られた。さらに同年9月18日の文部省訓令第18号によって、女性教師の産前産後の休養が認められることになり、教師供給母体としての女性の実効性が重要視されるようにもなった。したがって、小野の殉職は、女性教師が実際の教育を担う一大勢力として注目を集め、自ら組織化しつつあった時期に生じた事件であった。それゆえ、その殉職事件の表象は、若い女性教師によってなされた子どものために自らの命を擲つ美しい行為へと人々の想像力を接続し、男性に劣る存在として見られ、扱われていた女性教師が国民教育に男性と同様に寄与し、機能する存在であり得るということを開示する梃子として作動することになった。

付言すれば、教師に限らず、第1次世界大戦中、戦後の好景気によって、「職業婦人」という言葉の流行に見られるように、大量の女性の産業分野への進出が見られた。職業婦人という言葉の流行は、女性の表象が、家族や家庭という私的領域のエコノミーに専念するものから、国家に貢献するものへと転換し、女性の身体が社会的領域のエコノミーに動員されていく事態が生じていたことを示唆している。したがって、小野の殉職の社会的出来事化には、女性を巡る表象の変容が伏在していたと言えよう。

ところで、大正期の教師文化については、唐澤富太郎『教師の歴史』（創文社、1955年）、石戸谷哲夫『日本教員史研究』（大日本雄弁会講談社、1958年）、石戸谷哲夫・門脇厚司編『日本教員社会史研究』（亜紀書房、1981年）、陣内靖彦『日本の教員社会』（東洋館出版、1988年）などが論じており、教育社会学を中心に研究が蓄積されてきた。本論文との関連で言えば、教育、教師に関連する数々の出来事を蒐集した唐澤の前記研究において、松本と小野の殉職が言及されている⁶。唐澤によれば、小野と松本の殉職に代表される殉職教師の存在は、第1次世界大戦後の好景気を背景として低給の教師が、一方で教職に対する自尊心を喪失し、他方で人々から敬意を払われない存在へと変容した時期に、教職に対する聖職観を教育関係者や一般の人々の心情に訴えるものであったという⁷。

しかしながら、別の箇所「大正期に至つて、女教員の著しい進出を見るに至つたことは、教師像の変遷史上見逃せない現象である。」⁸と指摘しているにもかかわらず、唐澤の視角には、小野と松本の性差への眼差しが欠如している。小野の殉職は松本の殉職以上にメディアで話題となったが、前述したように、その大きな理由は小

野が女性であったことにかかわっている。事実、在野の教育ジャーナリズム研究者木戸若雄は「小野の行動が世人の魂を強くゆり動かしたのは、死をも怖れない責任感や犠牲的精神にあるのはいうまでもないが、小野が婦人教師であった点も強く人の心を打った。」⁹と指摘している。小野が女性教師であったことが、人々の関心が彼女の殉職事件に輻輳する大きな原因であり、しかも彼女が新任教師であるという純潔性、処女性が、その関心を増幅させたことを見逃すことはできない。

しかし、数多くの人々の関心が小野の殉職事件に蝟集した背景には、別の側面も存在していると考えられる。つまり、第1次世界大戦を契機とする近代国家の再編制と教師像の変容との連関という側面である。

第1次世界大戦後のワシントン会議（1921-22年）において九カ国条約、四カ国条約、海軍軍縮条約が成立し、東アジアの新しい国際秩序であるワシントン体制が確立したことによって、「一等国」としての「大日本帝国」という表象は内実を伴うものとなった。教育界ではこれに先行する形で、内閣直属の諮問機関である臨時教育会議（1917-19年）が、第1次世界大戦後における世界史のプレイヤーとしての地位を確固たるものとするための教育改革を志向し、高等教育機関を中心に学制の改革を目指した立案を行っていた。また、1910年代以降の教育界では、私立学校や一部の（高等）師範学校附属小学校を中心に新教育が展開し始め、10年代後半には教師以外の者も新教育運動に参加していた。一方に一等国に相応しい教育への欲望が、他方にデモクラシーや人道主義という理念とともに語られる社会改造の重要なモメントとしての教育改革への欲望が存在していた。両者の欲望が収束したものこそ、1922年に教育界を中心に人口に膺炙した「第二維新」、「第二の学制頒布」、「教育第一」という標語であった。しかし、教育を巡る欲望の収斂は、教育概念の発散を帰結する。実際、当時の教育概念には、人生、生活との差異の判別としない曖昧なものへと変容する事態が生じていた¹⁰。そして、この事態は教師像の変容も促し、教師は教授のみではなく、子どもの全生活にも責任を持つという新たなイメージを浮上させる。それゆえ、小野の殉職事件は、全身全霊を傾け、ある場合には命を捧げ、子どもの生活に責任を持つという新たな教師像を浸透させる格好の素材であった。

以下では、松本と小野の殉職事件の表象を、後者にアクセントを置きながら記述することによって両者の差異を照射し、1920年代初頭において、教師がどのように国民教育、教育実践に関わろうとし、また教育界以外の人々からどのように表象され、逆に自らをどのように提

示したのか、さらにその結果として、どのような規範に遵って教師として振る舞うことになったのかを分析することにしたい。

Ⅰ. 祝祭化されざる殉職—松本虎雄の殉職事件—

前述した通り、松本虎雄の殉職事件は、1919年11月20日に東京府井の頭恩賜公園の玉川上水で生じた。彼が勤務していた東京市麴町区永田尋常小学校は、当日遠足を行い、井の頭恩賜公園に赴いた。到着後一旦解散した後、午前11時頃に松本が担任している3年生永田俊雄が前日までの雨のため水嵩が増していた玉川上水に陥り、松本は永田を救おうと身を投じた。しかし、松本はそのまま行方不明となり、翌日午前11時頃久我山で死体が発見された。(なお、永田は、現場を通りがかった麴町区九段の久保濱呉服店店員大原玉治、藤田勇治郎、増井英夫によって救助された。)

22日に開かれた麴町区臨時区会では、区からの3000円と永田俊雄の父與吉が申し出た弔慰金1000円を合わせた4000円を、2000円を遺族への弔慰金、1500円を葬儀費、残りを雑費として支出すること、また松本の葬儀を区葬とすることを決定した。そして29日に青山斎場で営まれた区葬は、山川健次郎東京帝国大学総長、田尻稻次郎東京市長、澤柳政太郎帝国教育会長など約3000名の会葬者を集める盛大なものとなった。

さらに、松本はさまざまな団体から表彰されもした。時事新報発起義勇表奨会が20日付で表奨状と金200円を贈呈したのを始め、文部省、東京府、国民新聞社などが松本の行為を表彰し、弔慰金を贈ったのであった。麴町区在住国民党代議士鈴木梅四郎、新橋車夫組合を始めとする数多くの団体、個人も、弔慰金、弔電を贈っていた。その他、東京府は、11月20日付で松本を4級上俸とする辞令を発した。

では、公的には大きく扱われた松本の殉職事件は、新聞や教育雑誌などのメディアにおいてどのように扱われたのであろうか。

新聞においては、この事件は、11月21日付で報道した『東京朝日新聞』、『報知新聞』を始め、東京各紙の紙面を松本の肖像や区葬の様態を伝える写真を交えながら賑わせた。管見の限り、例えば『東京朝日新聞』には11月21日～12月4日付の紙面に9の記事が、『時事新報』には11月22日～12月9日付の紙面に合計12の記事と写真が掲載されていた。その他、『時事新報』には、弔慰金贈呈者の名前、住所、弔慰金金額が連日掲載され、同紙に送られた弔慰金は約970円に達した。各新聞社に送られた弔

慰金は合計すると、年末までに3000円に達したという¹¹⁾。

このように新聞では松本の殉職事件は大きく扱われたが、一方の教育雑誌ではほとんど言及されなかった。

『教育時論』には、第1247号(12月5日発行)の日誌欄の11月20日と同29日の項目に松本の殉職と区葬についての記述があり、短評欄に「嗚呼松本教員」という記事が掲載され、八面鋒という投書欄に松本の殉職を巡る表象に言及した投書が載せられていた。しかし、『帝国教育』では、第450号(1920年1月1日発行)に藤原生「前月の教育小観」の最後の項目「一四、永田小学校訓導の殉職」で松本の殉職が話題となったのみで、『教育研究』でも、第200号(同前)の「浮世のぞき!!」欄における「小学校教員の殉職」で言及されただけであり、『教育論叢』、『教育学術界』といった主要な教育雑誌には、松本の殉職についての記述が全くなかった。以上のように、松本の殉職事件に対する教育界の反応は頗る鈍いものであった。

松本の殉職を教育界よりも大きく扱ったのは、1906年2月11日という紀元節を期して設立され、「流汗鍛錬同胞相愛ノ主張ト実現トニ因リ皇国ノ進運ニ貢献スル」ことを目的とする教化団体修養団であった。東京府立青山師範学校生蓮沼門三を主幹とする修養団の設立には、蓮沼の同級生であった松本も参加し、以後幹事として活動にかかわり続けていた。松本は修養団の機関誌『向上』(1908年3月創刊)の命名者でもあり、1914年3月から1915年12月まで同誌の編集主任を務めていた。

修養団は、『向上』第13巻第12号(12月15日発行)を急遽「松本氏殉職追悼号」として発行したが、松本と永田俊雄の写真が口絵を飾った同号には、修養団長でもあった東京市長田尻、文部大臣中橋徳五郎、内務大臣床次竹二郎、帝国教育会長澤柳、蓮沼などの追悼文、そして松本の略歴、遺稿「死生論」などが掲載された。また、同団は、松本氏追悼講演会を12月10日に神田青年会館で聴衆約1500名を集めて開き、澤柳、江原素六などが講演を行った。さらに、単行本の刊行を決定し、『向上』第14巻第4号(1920年4月1日発行)には『犠牲の人松本訓導』の広告を掲載した。(第14巻第5号(5月1日発行)には、「種々の事情により、延々となりし『松本訓導』も早や遠からず市に出ずべし。」¹²⁾と記されているが、実際出版されたかどうか確認できていない。)その他、同団は、団内に記念教育図書館を建設することを決定したという¹³⁾。

しかし、修養団が松本の殉職を大きく扱ったのは、生前の同団への貢献に報いるためばかりではなかった。追悼号において蓮沼は、松本を「君が人間的の技能に至つ

ては極めて貧弱であつた。教授法も、交際術も、拙劣であつた。」¹⁴⁾としており、略歴でも松本は次のように語られている。

「君は決して技巧の人ではなかつたから、教授法などの見るべきものはなかつたが、至情の人であり熱情の人であつたから、教へ子には親が子に対する温情を持つて対してゐたので、純なる児童の心には、何時か君の愛情が植えつけられて、児童から父の如くに慕われてゐた。」¹⁵⁾

つまり、教授を役割とする教育者として有能とは言えなかつた松本は、修養団の主義に殉ずることによって、その存在の輝きを、同団だけでなく教育界でも増したのであり、蓮沼は松本の殉職について、「君よく死んで呉れた。君は修養団を代表して主義の為に殉じてくれたのだ。教育者を代表して其の教へ子の為に死んで呉れたのだ。」¹⁶⁾と意味づけていた。松本の殉職は、同団の主義の格好の宣伝媒体として扱われていたと言える。

修養団の言説に見られる教授よりも子どもへの愛情、犠牲精神を重視する志向を、澤柳も共有していた。澤柳は、松本の殉職が教育界で持つ意義を、次のように述べている。

「教育者に貴ぶ所は、児童に対する純愛を第一とするは自分の平生の確信である、然るに學術を修むるに才幹を磨くに努むる者あるも、真に児童に対する愛情を懐く教育者の極めて少なきは、自分の最も遺憾とした所である、然るに今君の如き、真教育者あるを見るは、自分等の大いに意を強くする所である、近時頗る物質化して、献身犠牲を以て却つて迂愚と見んとする我が社会も、君の純愛に動かされて、君の美しき最後を称へて措かない、君は死して尚ほ人を感動するものである、洵に教育社会は君あるによりて面目を施した次第であります。」¹⁷⁾

しかしながら、教授よりも子どもに対する愛情を重要視し、それゆえ松本を「真教育者」として最大限に評価する澤柳の言葉は、教育界で広範に共有されるものでなかつたことを我々は既に確認している。新聞で盛んに報道され、『噫松本訓導』（国際活映株式会社制作）が1920年3月14日から1週間浅草公園大勝館で上映され、国民道徳講演会によって松本の幻灯講演会が同じ頃行われたように¹⁸⁾、社会的反響が見られたにもかかわらず、教育界は松本の殉職に冷淡だった。

事実、前述の『教育時論』八面鋒に掲載された読者の投書は、次のように記している。

「近頃の東京発行の諸新聞は松本殉職訓導の記事を連日記載して、その人物を賞賛したり、寄附金否弔

慰金を送つたり、近頃になく大事件のやうに取扱つて居る、飛行機で惨死してもシベリアで我忠勇なる軍人が戦死しても僅かに五六行でかたづけてしまふ新聞紙がかうも大々的に騒ぐのは一体目下教育問題がやかましいからだらうかそれとも松本訓導の立派な行動の結果だらうか、それとも誰人かがうまく（？）太鼓をたゝいたのであゝも世人の同情が集つたのだらうか、今日まで死を以て生徒を救助しようとした訓導が全国中に唯一の一人もなかつたらうか？もしも松本訓導がかりに我茨城県の或村の小学校の訓導だつたらどうだらう、またもしも北海道あたりの出来事だつたとしたらあんなに同情が集つたらうか？各新聞があんなにかき立てるだらうか文部大臣の弔辞が出たらうか。（下略）（茨城県某私立小学校教員廣崎良之助）」¹⁹⁾

しかし、松本の殉職に対する教育界の冷めた反応を象徴するこの教師の言葉は、東北の寒村で生じた女性教師の殉職事件によって裏切られることになる。

II. 殉職というメディア・イベント

—小野さつきの殉職事件—

宮城県刈田郡宮尋常高等小学校訓導小野さつきの殉職事件は、森鷗外の病状が新聞紙面を賑わせていた1922年7月7日に生じた（鷗外は7月9日死去）。その日、小野は、5時間目の図画の時間に野外写生を行うために担任児童4年生56名を引率して、前日の摂政裕仁奉迎の際に選定した白石川河畔の万歳河原と呼ばれる場所に出かけた。当日は暑かったため、児童は水泳をしたいと申し出たが、小野は写生終了後に浅場で水遊びのみを許可した。しかし、3人の児童が対岸に繋留されている小舟を見つけ、その小舟まで行こうとして深みに嵌った。彼らを救助しようとした小野は、大場徳治、志村正雄を救うことができたが、留年し、最年長で身体も大きかった成澤與右衛門とともに溺死することになった。

その後、9日に仮葬儀が行われ、14日の本葬は、貧しい村としては少なくはない1800円を宮村が支出し、三谷寺で村葬として営まれた。本葬には、「力石宮城県知事を始め、佐藤刈田郡長鈴木教育課長秋葉女子師範学校長県会評議員他府県代表者他郡市教育会保護者会代表者各小学校長同窓会職員生徒郡内及び村内有志者」²⁰⁾、各町村小学校教員、児童、青年団、処女会、在郷軍人会などから3000人余りとも、10000人とも言われる会葬者があり²¹⁾、県知事、郡長、県教育会長、女子師範学校長などの弔辞の他に、多数の弔歌、弔電が寄せられる壮大なもの

なった。

小野は、文部大臣（7月12日付、金100円）、宮城県知事（7月7日付で人命救助表彰、金100円、7月10日付で教育功労表彰、金50円）、刈田郡長（7月14日付、金30円）、時事新報発起義勇表彰会（7月8日付、金300円）、国民教育奨励会（7月12日付、金100円）、日本弘道会（7月17日付、金一封）など数多くの公人、団体から表彰された。さらに「力石県知事は取敢へず七月七日附を以て現俸給九級下俸（四十円）より特に一級上俸（百八十円）に昇給する事に決し」²⁹、男性も含めた小学校教師でこの待遇を受けるのは、宮城県で初めてという破格の扱いを小野になした。

その年の3月に宮城県女子師範学校を卒業したばかりの新任女性教師の殉職に対する社会的反響は大きく、教育界の反響も松本の殉職を遥かに凌駕するものであった。教育界の小野の殉職への反応は次節で扱うこととし、ここでは教育界以外の反応を概観したい。

まず、新聞について言えば、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』で7月8日付で小野の殉職が報道されたのを始めとして、小野の殉職事件関連記事、小野の肖像写真、東京市視学長佐々木吉三郎が東京市内の女性教師を集めて行った模様を伝える写真などが東京各紙の紙面を飾った。管見によれば、『東京朝日新聞』には7月8日～同18日付紙面に合計17の記事と写真が、『時事新報』には7月9日～同23日付の紙面に合計11の記事と写真が、『東京日日新聞』には7月8日～同22日付紙面に合計11の記事が掲載されている。

また、小野が女性教師であることから、少女雑誌、婦人雑誌、新聞における反響も大きかった。毎週日曜日に発行されていた『婦女新聞』は、7月第3日曜日に「殉職小野さつき氏」を掲載し、同第4日曜号では「小野さつき氏追悼録」という特集を組み、社説「殉職女訓導」、日下さき「不忘山と白石川」、佐々木吉三郎「遭難現場を訪問して」、「故小野訓導最後の書簡（全文）」、一学友「さつきお父さん」、殉職事件現場付近略地図、体操服姿の故人の写真を掲載した。また、『女学世界』（博文館）は、9月号に「職に殉じた女訓導の美しく尊い死」、夢野歌二「彼女の学生時代と彼女の殉職が与へた社会的反響」、佐々木吉三郎「遭難地を視察して」（談話）、「故人をめぐる挿話の数々」、小野訓導殉難講演会の模様を伝える口絵写真と肖像写真を掲載した。その他、『婦人公論』（中央公論社）と『婦人之友』（婦人之友社）の8月号、『少女』（時事新報社）、『婦人画報』（東京社）、『女学生』（研究社）、『主婦之友』（主婦之友社）、『婦女界』（婦女界社）、『母之友』（同前）、『婦人倶楽部』（大日本雄弁

会）の9月号など、数多くの少女雑誌、婦人雑誌が関連記事を掲載していた。さらに、活字メディアに焦点を合わせれば、小野の殉職の約1ヶ月後の8月8日付『時事新報』には、佐藤武『小野訓導の死と其前後』（隆文館）の広告が早くも掲載され²⁹、約2ヶ月半後の9月25日には宮城県教育会・刈田郡教育会編『殉職訓導小野さつき女史』（実業之日本社）が発行された。

付言すれば、『殉職訓導小野さつき女史』の出版元である実業之日本社が発行していた『婦人世界』は、『東京日日新聞』7月16日付4面、『読売新聞』同月17日付1面、『時事新報』同月18日付7面などに「小野訓導の殉職を嘆美する小学唱歌」募集の広告を出し、締切が同月25日という短期間の募集であったにもかかわらず、6000以上の応募を集めた。当選歌は、野村光葉「小野訓導の殉職美談」、佐々木吉三郎「敬慕に堪へぬ小野訓導の人格」、特派記者「小野訓導の村葬に参列する記」、遭難現場・葬儀・遺品などの口絵写真を掲載した9月号で発表し、10月号には1等当選者齋藤子郊の手紙を掲載した。さらに、山田耕筰が齋藤の歌に作曲を施して、日本蓄音機商会からレコードが発売され、川端龍子装丁による『小野訓導の歌』（実業之日本社）も発行された²⁹。

活字メディア以外では、小野殉職事件の映画化も活発に行われた。活動写真協会が中心となって制作した映画は7月19日に福島公会堂で、25日から仙台で、その後各地で上映されており、京都でも映画制作が盛んであったという²⁹。また、松竹制作『噫小野訓導』が浅草松竹館で7月23日から、日活（関東派）制作『殉職美談女訓導』が7月23日浅草公園オペラ館で上映され、その後両社の直営映画館で上映された。どの映画なのか定かではないが、北海道の近藤愛子は『婦人世界』に「九月号の小野先生の記事を読んで、あまりの悲しさに泣きむせんだ私は、それから間もない九月十八日に、当地の活動常設館で、小野先生の活動写真を見て、また新しい涙を流しました。」²⁹と投書している。この投書から判断すれば、映画は全国各地で上映されたものと推測できる。

映画化に加え、小野の殉職事件は演劇化、演歌化、琵琶歌化もされた。演劇について言えば、東京本郷座が8月3日から『訓導の死』（碧虚郎作、3幕5場）を上演した。演歌については、添田啞蟬坊が『小野さつき訓導の歌』を作り、琵琶歌では、『白さつき』が作られた。

その他、既述したように、佐々木吉三郎が東京市内にある小学校女学校の女性教師を集めて7月14日に神田一ツ橋小学校で講演会を開いたのを始め、22日に宮城県教育会、宮城県女子師範学校、同校女子同窓会主催の追悼講演会、23日に日本基督教、市民自由大学主催の追悼大

講演会など、各地で講演会が開催された。また、8日に宮城県女子師範学校寄宿舎内で追悼会が、14日に仙台市西本願寺別院内玉耶処女会主催の追悼法会が、16日に白石公会堂で追悼音楽会が催されていた。さらに、仙台で演奏会を開く予定であった日本初の世界的プリマドンナ三浦環は、100円の弔慰金を遺族へ贈るとともに、その演奏会で小野が好んだ『アベ・マリア』（グノー作）を歌った。

これらに加え、7月11日付で宮城県教育会、刈田郡教育会、河北新報社、仙台日日新聞社、東華新聞社、新東北新聞社の発起によって弔慰金募集も行われることになり、その弔慰金で追而記念碑の建立、義金による教育基金「小野さつき女史奨励会」の創設などがなされた。

以上確認してきたように、小野の殉職は、松本の殉職以上の社会的な出来事になり、人々の想像力、興味をその事件へと整流しながら祝祭空間を構成し、まさに国民的メディア・イベントと化した。そして、このイベント化した小野の殉職事件に対する教育界における反響は、前述したように松本の殉職事件に対するものを超えるものであった。教育界はどのように反応したのであろうか。

Ⅲ. 教育界における反響—教師文化の布置—

松本の場合とは異なり、教育界は大々的に小野の殉職事件を取り上げた。種々の教育関連団体からの表彰、講演会の開催については前節に記したが、ここでは教育雑誌を中心に、小野の殉職に対する教育界の反響の様相を俯瞰したい。

『教育時論』第1342号（7月25日発行）は、原田実「生ける幾多の小野訓導を想ふ」、T生「小野訓導殉職のこと」を掲載し、日誌欄の7月14日の項目、時事欄の「殉職小野訓導表彰」でも小野殉職を扱っていた。さらに、第1349号（10月5日発行）に掲載された北沢種一「教育殉職者叙勲法制定の必要」でも、小野の事件が話題となった。小野の殉職事件について数多くの文章をものした佐々木吉三郎が前主幹であった東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会が編集する『教育研究』も、小野の殉職を大きく扱った。第244号（8月1日発行）に千葉春雄「殉職の小野訓導」を、第245号（9月1日発行）に佐々木秀一「児童に対する愛」を、「学制頒布五十年記念号」であった第246号（10月1日発行）に佐々木吉三郎の詳細なレポート「殉職と教育者について」を掲載していた。

『教育界』第21巻第9号（9月3日発行）は、社説「殉

職と責任」で小野の殉職を論じ、『教育論叢』第8巻第3号（9月1日発行）は、河野清丸「小野訓導を犬死にたらしむ勿れ」を載せていた。また、当時の『教育論叢』には新教育の拠点の1つである千葉師範学校内白楊会による「自由教育論叢」が連載されていたが、第8巻第4号（10月1日発行）の同連載中の石井信二「教育日誌の中から」において小野の殉職事件が言及されている。その他、『学校教育』第9巻第9冊（9月1日発行）に掲載された古場政喜「児童そのものを忘れるな」にも、小野の殉職への言及が見られる。なお、代表的教育雑誌の一つである『帝国教育』に直接小野の殉職事件に言及した記事は掲載されなかったが、第482号（9月1日発行）に前述した佐藤武『小野訓導の死と其前後』の広告が掲載されていた。

これらの教育雑誌に掲載された文章には、いくつかの視角が孕まれていた。まず、小野の殉職を美談として表象し、彼女の児童に対する愛情、犠牲を厭わない精神を強調することによって、教師の職業意識、連帯心を再構成しようとするものが存在した。宮城県出身であったことから、小野の殉職に多大の関心を抱き、事件現場まで赴いて情報を収集し、彼女の殉職事件を教育界に生じた偉大な事績として称揚し、そこに教育と教師の理想像を読みとる佐々木吉三郎の文章が、その代表であろう。佐々木は、次のように記している。

「能く調べてみると小野訓導は此四月に就任したばかりの新しい訓導で女子師範を出ると直ぐ宮村尋常高等小学校に赴任したのであるから保護者との関係も子供等との情愛も短時日の間にさう十分に諒解もされて居らなかつたらうと思ふのに事實は新聞の報ずる以上に麗しい関係になつて居つた。（中略）矯めず作らずして自然に出来た一個の貴重な芸術品とも見えるやうな麗はしい事件に対して、苟も之を利用するとか或は之を誇張して言ふやうな穢らはしい心は微塵だも加えていない。」²⁷⁾

佐々木が積極的に小野の殉職に関する講演活動、執筆活動を行ったのは、教師が自尊心を喪失しつつある状況において、一等国の将来を担う少国民の育成に愛情と全精力を注ぐという聖職意識、そしてその意識に基づいた教師間の紐帯を構成する重要なモメントとして、小野という理想的教師による犠牲的精神に基づいた殉職を把握したからだと思える。

また、低給に苦しみ、人々から敬意を払われなくなりつつあった教師の社会的地位、給与の向上を目指す政治運動の格好の話題として、小野殉職の美的表象を利用するものも存在していた。例えば、『教育時論』編集者原田

実は、次のように主張している。

「かゝる非常破格の出来事に際会したる場合の行為事績に対して社会及び政府当局が漸くこれを認むるに吝ならざるものあるを知つて甚だ愉快であるが、平常時の行為事績に対しても同様にその価値と功績とを認むるやうにあつてほしいといふことである。

(中略) 吾人は小野訓導の事績を敬慕すると同時に、幸にして小野訓導の如き災難に遭遇することなく而かも女史同様炎々たる教育的精神に燃えて日々の功績を積みつゝある幾多の生ける小野訓導の存在することを確信するものであるが故に、この機会に於て敢へてこれらの人々に対する社会及び当局者の認識を要求せざるを得ないのである。」²⁸⁾

さらに、佐々木の視角を共有しながらも、教師と警官や兵士との差異を剔抉し、子どもと教師が命を失うことは、「教育の本質に違ひ且つあり得べからざる不祥事である。(中略) 犠牲は尊い、然し犠牲によつて教育は完いのではない。」²⁹⁾と述べ、今回の事件の責任の所在を明確にする必要性を示しているものもある。しかし、この視角は、逆説的に教師の殉職を警官や兵士の殉死と類比的に捉える視線が多くの人々の身体に刻印されつつあったことを照射している。

その他、教育雑誌ではないが、婦人雑誌に掲載された大阪のある女性教師の文章は、小野の殉職が必要以上に美談化される状況は、小野が女性であることに起因し³⁰⁾、「深い省察と明らかな諒解を持たない人達の徒なセンチメンタリズムは唾棄すべきものだ」としている。彼女は、小野の子どもに対する愛情は衝動的本能的なもので、ペスタロッチやフレーベルに体现されている意志的努力的なものではなく、「全我的抱擁の場合にのみ作用し始める」「本当の愛」とは異なっていると語り、非常時に小野のような子どもへの愛情が作用するのは当然のことで、むしろ教師は日常的な行為において「本当の愛」を探究するべきであるという視角を提起している³¹⁾。前述の石井信二も、児童は「神の子」であり、教師はその子どもを育成する「神の道」に日常的に身を捧げることによって教職に殉じなければならないと主張している。石井は、次のように記している。

「殉職とや、そは豈独り松本訓導、小野訓導のみの問題ではない。天下の教育者は、みなこれ殉職者でなければならない。一は瞬間に於て命を縮め、一は永きに亘つて一身を捧ぐ。永きに亘るが故に殉職ならずと思惟するは、余りに外面に拘はれた観察である。(中略) 高貴栄達は人の望むところ、されどそれがために神への道に殉職する魂を穢してはならぬ。

／今日もまた神は許してくれるであらうか。あの尊き、愛らしき児童が、滔々たるタイムの流れの中に、溺れはしなかつたらうか。物象しか見ることの出来ない弱き人間の眼には、神の子の溺れたのを、見定め得ないけれども、全智全能の神は、照覧しますであらう。／汝教育者よ、汝の魂の影暗きを肯定してはならぬぞ。」³²⁾

小野の殉職に対する教育界の反応は、以上のような布置を構成していた。一方に、小野の殉職を祝祭化し、殉職を頂点とする犠牲の感情によって国家的使命に貢献する教師の共同性を再構成しようとする欲望があり、経済的社会的地位に喘ぐ教師の待遇を改善しようとする欲望が存在していた。これらの欲望は、国家に貢献する教師の役割、その意義を最大限に評価し、教師像を戦死によってその価値が評価される兵士像に重ね合わせようとするものと言えよう。しかし他方には、これらの視角に距離を置き、教育と殉職は相反し、非常時のみではなく、教師は日常的に子どもに愛情を注がなければならないと主張する視角が存在していた。

それゆえ、教育界の反響は均質なものではなく、差異を孕んだものであった。しかしながら、そのズレにもかかわらず、小野の殉職に象徴的に顕現した犠牲の感情、子どもへの愛情を、日常的な学校教育の空間において教師が身体化している／するべきであることを認めている点は、全ての視角に共通している。換言すれば、小野のような母性を体现する女性教師の殉職は、教育空間を教師の犠牲的精神に媒介された教師と子どもの一体感が充溢する場として表象する格好の梃子として機能した。

おわりに

松本虎雄と小野さつきという2人の教師の殉職を巡る表象の差異に照準しながら、我々は教師文化の変容の一断面を分析してきた。松本の殉職に対して冷淡であった教育界が小野の殉職に対して大きな反響を示した背景には、彼女の殉職が1922年という学制頒布50周年という国民国家形成に貢献してきた過去の教育活動、教師の犠牲的精神が言祝がれ、学制を画期とする近代日本の国民教育が歴史化された年に生じたという点があった。

また、第1次世界大戦を契機とする産業資本主義の発展に伴う新中間層の増加、職制と学歴の結合、改造や解放を旗印とするデモクラシー思想の浸透は、その状況に応じた子どもの学力や個性を要請する教育改革を国民的論題としたが、地方の寒村の若い新任女性教師という多重の周縁性を刻印された小野の殉職は、身も心も捧げて

子どもに愛情を注ぎ、教育実践に尽力するという新たな聖職教師像を喚起する象徴的出来事であった。産業資本主義の進展が女性を家庭から社会のエコノミーへ動員する事態が生じ、小学校教師に占める女性の比率が上昇してただけに、小野の殉職事件は意義深いものとなった。

したがって、小野の殉職は、過去50年間の教育の事績を集約した出来事であると同時に、一等国としての大日本帝国という新たな国家像に相応しい国民を育成する今後の規範的教師像を提示する事件であったゆえに、人々の注目が蝟集したと言える。

さらに、小野の殉職に教育界の関心が輻輳したことは、従来あまり注目を集めなかった教師と殉死との繋がりとという位相が照射されたことを意味しており、戦死者において頂点に達する殉死という比喻によって教師を捉えることは、死を希求する美学への欲望が教師文化に内面化され始めたことを示唆している。このことは、戦争の比喻によって教育を表象する高度国防体制下の総動員体制における教師の心性の到来を予示していると言える。したがって、例えば、前節で引用した千葉師範学校訓導石井信二の文言にある「神」という最終段階の審級が、1920-30年代を通じて国家、天皇へと転位していく過程を辿ることが研究課題の射程に捉えられることになるだろう。

1920年代初頭の教育は、大正新教育に焦点を合わせて記述される場合が多い。しかしながら、本論文が対象とした小野の殉職を巡る表象は、国家对教師の相克に留まらない教師文化の底流の一端を描出している。

(指導教官 佐藤学教授)

注

- 1) 教育塔建立の経緯については、大阪市教育会編纂『教育塔』、帝国教育会編纂『教育塔誌』(この2冊は、上沼八郎監修『教育事件・教育論争史 事例・研究篇 6』ゆまに書房、1991年。として合本復刻されている)を参照されたい。なお、後に言及する松本、武藤、醫王は第1回教育祭合祀者に含まれ、小野は第2回教育祭合祀者に含まれている。
- 2) 拙稿「「教育第一」という言説—学制頒布五〇年記念祝典における表象の力学—」『現代思想』第29巻第2号、2001年、189-205頁。を参照されたい。
- 3) 田淵巖『教育美談噫!! 殉職の十訓導』日比書院、1923年、序文。
- 4) 例えば、醫王訓導の殉職について、田淵は次のように述べている。

「天下知らずして、この悲壮なる殉職教育者の事績を讃え

ざるか、抑も亦そこに喧伝され謳歌されし小野さつき女史の花々しき行為に比して、劣り遜ずる何ものかのあるによるか、抑も亦、地の利、人の力、共に之がよろしきを得ざりしに基くや? / (中略) 世何ぞ夫れ醫王訓導の死に対してのみ冷かにして疎なるや、筆者の義憤激発して已み難き所以である。」(同前、299-300頁)

- 5) 数字は、各年度の『日本帝国文部省年報』に依拠している。
- 6) 松本と小野の殉職事件については、河野通保『学校事件の教育的法律的实际研究』下巻、1934年、文化書房、9-10、15-19頁。にも掲載されている。(本書は、上沼監修『教育事件・教育論争史 事例・研究篇 4』(1991年)として復刻されている。)
- 7) 唐澤富太郎『教師の歴史—教師の生活と倫理—』創文社、1955年、144-150頁。
- 8) 同前、105頁。
- 9) 木戸若雄『婦人教師の百年』明治図書新書、1968年、99頁。
- 10) 「教育第一」と教育概念の膨脹=拡散の連動については、注2)の論文で考察した。
- 11) 『教育研究』第200号、1920年、114頁。
- 12) 『向上』第14巻第5号、1920年、68頁。
- 13) 『東京朝日新聞』1919年1124日付7面。
- 14) 蓮沼門三「松本虎雄君と修養団」『向上』第13巻第12号、1919年、10頁。
- 15) 「松本君の略歴」同前、4-5頁。
- 16) 蓮沼、前掲文、6頁。
- 17) 澤柳政太郎「真の教育者であつた」『向上』第13巻第12号、5頁。
- 18) 『向上』第14巻第4号、1920年、76頁。
- 19) 『教育時論』第1247号、1919年、46頁。
- 20) 宮城県教育会・刈田郡教育会編『殉職訓導小野さつき女史』実業之日本社、1922年、34-35頁。
- 21) 例えば、同前書、『時事新報』は、3000人余名とし、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』は、10000人としている。
- 22) 『殉職訓導小野さつき女史』23頁。但し、河野清丸は「力石宮城県知事は、遭難当日(中略)九級俸の女史を七級上俸に陞せ、更に数日後、遂に一級上俸に進めて、県下教員の最高級たらしめた。」としている(「小野訓導を犬死たらしむる勿れ」『教育論叢』第8巻第3号、138頁)。
- 23) 『帝国教育』第482号(8月29日発行)に掲載された広告によれば、同書は「発刊後旬日間に忽ち五版」という凄まじい売れ行きであった。
- 24) 1等当選者については、次のような投書が寄せられている。「小野訓導の唱歌、なるほど一等当選の価値は充分です。私どもの学校ではすぐ謄写版にして九月早稲教授することになつて居ります。近所の他の学校でも皆さうすると申してをりました。(下略)(滋賀 八重子)」(『婦人世界』第17巻第10号、1922年、166頁)
- 25) 『殉職訓導小野さつき女史』119頁。

- 26) 『婦人世界』第17巻第11号, 1922年, 159頁。
- 27) 佐々木吉三郎「殉職と教育者について—小野さつき女史—」
『教育研究』第246号, 1922年, 55-65頁。
- 28) 原田実「生ける幾多の小野訓導を想ふ」『教育時論』第1342号, 1922年, 1頁。
- 29) 社説「殉職と責任」『教育界』第21巻第9号, 5頁。
- 30) 同様の点を, 『婦人世界』に掲載された女性教師の投書が指摘している(ロオズ「女教員の不平」『婦人世界』第7巻第10号, 167頁)。
- 31) 溝口美知子「女教師の観た小野訓導の殉職事件」『婦人公論』第7年9月号, 中央公論社, 1922年, 70-73頁。
- 32) 石井信二「教育日誌の中から」『教育論叢』第8巻第4号, 149-150頁。
(付記 引用文中の旧字体・俗字は新字体に改め, 圈点は省略した。)